

## 紹介

柴田 実編

### 泉佐野市史

泉佐野市は、古くは茅渚宮と衣通姫の伝説を伝え、中世では九条家の莊園を市域に含み、近くは和泉南部における商業的農業、綿、タオル工業、水産業等の中心地として発達した。それだけに学問的に幾多の興味を抱かせる地方であるが、かねてより京大柴田実教授を編集主任に、西村睦男助教、高取正男・浮田典良・脇田修氏らを主要メンバーとして準備されてきた市史が、市制施行十周年を記念して昨年五月上梓された。すでにこの執筆陣から予想されるように、本書は学界の最高水準と、地方史研究の見事な結合の成果である。本文四六六頁、史料篇三二四頁は、さまで大部ではないが、社寺の由緒、郷土名家の事歴、近代教育文化発展の細部など「誌」的要素は殆んど割愛し、編者は「骨格的な概説に過ぎぬ」と謙遜されるものの、史料を博搜して構成された泉佐野市史を、日本史の一環として位置づけ叙述することを一貫されている。それ

は、位置と疆域、自然環境と人文、の序篇にはじまり、本篇は一章古代、二章律令制から荘園制へ、三章中世、四章近世―幕藩封建社会の成立―、五章封建社会の繁栄、六章封建社会の動揺、七章近代佐野の成立と発展、に構成された篇目を一瞥するだけですでに明らかであるが、逐一の紹介は止めて特に注目すべき点のみをあげれば次の諸点であろう。

第一に、民俗的事象は、それ自体単独に叙述することなく、歴史の流れの中に位置づけられていること。

第二に、未公開史料である「慈眼院旅引付」を以て、戦国期の荘園の実体や、公家と武士の葛藤が叙述されていること。戦国時代は空前の欠史時代だけに、読者をして垂涎せしめずにはおかない。

第三に、近世では、最近の摂河泉研究の成果を十分にふまえた上で、豊富な史料を整理し体系化が試みられていること。とともに、最近の近世史学界でむしろ冷遇されている文化について、十分の配慮がなされていること。

第四に、近代史では、各役場の史料保存の良好さと相まつて、人口動態から農業、漁業、綿、タオル工業など諸産業の発達について、

豊富な統計史料が駆使されていること、等である。

次に史料集は、和泉監正税帳より、明治の旧佐野町概況報告まで総数三三七点、日根文書、淡輪文書など中世文書、藤田家、新川家、古谷家、目家、川上氏蒐集文書、菊家、山本家、里井家、平松家、奥家、櫻井区共有文書など近世の在地史料、文部省史料館蔵の食野家文書などを集録する。ただ紙数の都合から、一部割愛があり、特に食野家では、大名貸関係史料が略されたのは惜しまれる。

とはいえ、吉沢義則氏筆後鳥羽院御製を浮かせた瀟灑な表紙見返し象徴するように、執筆者一同並びに市関係者一同の細心の配慮が、採録史料の校正のすみずみまで加えられている。しかも本書は、郷土史家の蓄積はあつたとはいえ、正味一年余の短時間で完成されたと聞く。執筆陣の豊かな学識はさることながら、本書完成につくされた努力は敬服するの他はない。とまれ本書は、数多い地方史誌の中にあつて、最も「史」的なものとして一つの典型をなすのではなからうか。(A5 版七九〇頁 昭和三年五月 大阪府泉佐野市役所発行)

(熱田 公)